



TITLE:

最近の火星面に就いて

AUTHOR(S):

渡邊, 恒夫

CITATION:

渡邊, 恒夫. 最近の火星面に就いて. 天界 1937, 17(195): 330-331

ISSUE DATE:

1937-06-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/167493>

RIGHT:

★ 最近の火星面に就いて ★

渡 邊 恒 夫

昨秋9月中旬に火星の観望を開始してより、既に半歳を過ぎ愈々火星は衝となつて、観測も本舞臺となつて來た。

現在迄に得たスケッチ總數を示すと、

	9 月	10月	11月	12月	1 月	2 月	3 月	4 月	5 月	計
スケッチ數	4	10	9	0	0	2	4	17.	18.	64枚

(・クツク 30cm 屈折機, 他は 15cm 反射機)

天候、シーイング共に9月—11月迄良く、12月以後2月末迄は全然駄目であつた。3月にも 良い日は 稀で、4月に入つてからやゝ持ち直したが、上旬が良く、中旬以後は殆ど観測不能。月末急にシーイングが収まり、今月中頃迄續いたが、20日過ぎから又々不良となつて了つた。従つて、大體に於て、最も多く観測されてゐるのは、經度 180° 附近で 100° 附近が最も少い。

望遠鏡は3月迄、15糎反射に330倍を使用し、4月以後クツク30糎屈折機に主として320—420倍を使つてゐる。詳しいことは後日に譲つて現在迄の観測に依る今年の火星の大體の有様を述べて見ると：——

北極冠は昨秋來規則正しい縮少を續けて居たが3月には殆ど停止の形となり、15糎には可成り困難となつた。4月に入つてから、クツク30糎ですら認め難い程淡くなり、時々姿を消して了ふ事すら有つた。5月にも 困難で、時々ボンヤリした白い斑點として認めてゐる。直徑は4月より僅か大きくなつた様である。多分秋口に、火星の極地を掩ふ霞の惡戯の爲だらう。之に反して南冠は物凄いの程白く輝いて居るが、火星の傾斜の爲、像の南端に僅かその片鱗を示して居るに過ぎない。模様は 290° 附近が最も賑やかで、 180° 附近が淋しい。

大シルチスは例年の如く、最も著しく濃く、綠色の著しい暗緑灰色を示して居り、中央及び南部を著しい白帶が横斷して居るのが目を惹く。この東か

ら伸びたトス・ネペンテス兩運河は頗る太く、雄大なカーブを畫いて北下し、カシウスに續いてゐる。カシウスは可成り濃く數個の濃斑がクツ付き合つて、丁度珠數の様な形をして居り、ユトピアはやゝ淡い。サビウス灣の西端にあるアリンの爪は非常に濃くて殆んど黑色に近く、4月末から時々2個に分離されてゐる。マガリチファ1灣は例年通りの姿を見せてゐるが、之から出てゐる。オクサス運河が著しく、ゲホンと交る所に一寸した斑點が見えてゐる。アシダリウム海は3月には頗る小さい可愛らしい形をしてゐたが、今では非常に濃く暗綠色で少し褐色を帶び、形は不等邊五角形をして中央附近に濃斑を見せてゐる。

エリアクス湖が非常に細い白帶 (Achillis pons) を隔てゝ、アシダリウムの南端に見えてゐる。この附近を3月21—22兩日霞か何かが掩つてゐた。ニロケラスは非常に大きくて2本の著しい帶に別れ、ルナエ湖が小さくこれに續いてゐる。

オリラ灣は例年並に濃く青灰色で、エオス、プロティ地方が著しく白い。ネクタ1運河は時々連鎖状を示し、ソリス湖が數個の斑點に分離されて居る。アガソダモン運河は常に瘤狀で、この先のチトニウス湖が頗る複雑な斑點の集合であり、更に西に續いてフェニックス湖が濃く圓形に見えてゐるのは、今年の特徴の一つであらう。この邊一帶に北接した部分は眞白く、前田氏は時々米粒狀の白斑に見て度膽を抜かれてゐる由。シレヌム海は濃く、氣流の良い時に濃淡が見える。160° 附近の大陸？ 上には無數の運河が入り亂れ、テンペ・アルカディア地方に白斑が澤山見えて居り、時々外縁に凸出して居る。

エリシウムは、黄白色で卵形をして居るが、周圍の運河がケルベルスを除く他は殆ど見えてゐない爲可なり見難い。然し像の缺け際に近附くと著しく白色に輝いて来る。ケルベルス I は無數の斑點の連つたものらしく、この南北兩端の湖が著しい。ハデスはやゝ太く、プロボンチス I、II が橢圓形をして濃い。今年はエウクシニスが淡い爲、この附近の様子は一昨年と餘程變つてゐる。キンメリウム海は濃いが濃淡様々入り亂れて非常に複雑し、殊に西端には著しい三つの濃斑が有る。アトランテス及びヘスベリアは、共に4月上旬非常に不鮮明であつたが、近頃急に著しく白色となつて時々輝いて居る。

(5月25日)